

# ストリッパー女王からの手紙

—<sup>おさべ</sup>長部日出雄の読み方—

郭 南 燕

青森県弘前市生まれの長部日出雄という作家は、小説、伝記、随筆、映画評論など数多くの作品を発表してきた。『津軽世去れ節』『津軽じょんから節』（1972年）で直木賞、『鬼が来た一棟方志功伝』（1980年）で芸術選奨文部大臣賞、『見知らぬ戦場』（1987年）で新田次郎文学賞、『桜桃とキリスト もう一つの太宰治伝』（2002年）で大佛次郎賞と和辻哲郎文化賞をそれぞれ受賞している。その文学世界は、コスモポリタニズムと津軽文化との融合を特色としている。それと同時に大衆娯楽を反映する作品も多数多様である。

本日の発表は、娯楽文化に関する長部の作品を取り上げて、長部がストリッパー女王からもらった手紙をどのように読んだのかを分析し、次のいくつかのことを明らかにしていきたい。

- 1) ジブシー・ローズというストリッパー女王はどのような人だったのか。
  - 2) 長部日出雄はジブシー・ローズにどのような思いを抱いているのか。
  - 3) 長部はジブシーの手紙をどのように読んだのか。
  - 4) その読み方を通して、長部文学のどのような部分が見えてくるのか。
- という4点である。

## 1. ストリッパー女王—ジブシー・ローズ

ジブシー・ローズは本名、志水トシ子である。1931年12月28日に福岡県大牟田市西宮浦町三十八番地で生まれた。4歳から日本舞踊を習い、小学校5年生の時、バレエをも習った。踊ることに無我夢中の女の子であり、「動きがやわらかく、リ

ズム感のよさといい、のみこみの早さといい、はじめから踊りのセンスは抜群だといわれている。1949年12月、長谷川一夫主宰の新演技座が博多で「ロマンスショウ」を公演した時、トシ子は毎晩このショーを観にいった。踊り・音楽・衣裳が華麗だった舞台に憧れて、自分も女優になろうと決意して、その劇団に従って上京した<sup>1)</sup>。上京直後、浅草常盤座の全国素人舞踊自慢コンクールというものに飛び入りして合格、製薬会社がスポンサーの「ストリップ・マイシン杯」を獲得したという<sup>2)</sup>。

その後、ジプシー・ローズは演出家正邦乙彦に指導され、徐々にストリッパー・スターになっていく。その日本人離れした容貌と身体は、とくに人の注目を引いていた。彼女の最も華麗な舞台は東劇バーレスク・ルームであり、1953年元旦から1954年1月までの1年間余である。東劇バーレスクのこけらおとしの前夜祭に、当時の著名文化人が出席している。石川達三、村上元三、正宗白鳥、村松梢風、大宅壮一、中野実、村山知義、舟橋聖一、久保田万太郎、林房雄、北村小松、伊藤深水、藤原義江、菅原通済、前田雀郎（川柳）、高橋誠一郎、岡田紅陽（写真）、市川海老蔵、市川猿之助、尾上松緑、中村勘三郎、尾上梅幸、市村羽左衛門、水谷八重子、市川翠扇など錚々たる来賓であった<sup>3)</sup>。

築地にある東劇バーレスク・ルームが歌舞伎座の間近だったので、人気役者たちはよく訪ねてきた<sup>4)</sup>。歌舞伎座で「源氏物語」を演出していた久保田万太郎は、舞台稽古の間に役者たちをストリップ・ショーへよく案内した。初めて見た市川左団次はジプシーの踊りの躍動に心を奪われ、「これはなかなかいいものだ。今後も機会あるごとに見たいものだ」と感嘆している<sup>5)</sup>。多くの文化人はさらに「風流バーレスク・クラブ」を作り、東劇の建物の中に設置した<sup>6)</sup>。

ジプシーには多くのファンがいる。駐日米軍GIたちは、東劇の5階から一階までの階段にズラリと並んで、花、キャンディー、ウイスキーなどを握りしめて公演後のジプシーを待っていた。その中に、ジプシーにプロポーズした人もいた<sup>7)</sup>。また、ジプシーを最良にした文化人には松村梢風、永井荷風、富田英三、土門拳などがいる。

ジプシーの特技は腰と尻を廻すグライドである。1回の公演で540回廻し、

「世界的水準をゆく」ものだと褒められている<sup>8)</sup>。東劇時代が終わってから、1955年10月から日劇ミュージック・ホールに移籍した。しかし、かの有名なグラインドが警視庁によって上演禁止されてしまい<sup>9)</sup>、ジプシーは、日劇で個性を發揮できなくなり、徐々にアルコールにはまっていた。日劇との2年間の契約さえ果たせなくなった。その後、地方廻りの公演にも出たが、長く続かなかった。1967年4月20日に山口県防府市のスナックの2階で急逝した。35歳だった。

彼女の活躍期は1951年から1956年までの数年間であったが、日本のストリップ界の最も輝かしい時期でもあった。彼女のグラインドを、戦慄しながら見つけた多くの人の中に、長部日出雄という青年がいた。

## 2. 長部日出雄のジプシー観

長部日出雄は1934年9月3日に青森県弘前市に生まれた。ジプシーより3歳年下。ジプシーが上京した時、長部はまだ弘前高校の学生であった。その時、長部は英字新聞を読んで、在日米軍のGIの偶像だったジプシーを知り、「ニキビだらけの田舎の高校生」である彼は、その「彫りの深いエキゾチックな美貌」に心を奪われていた<sup>10)</sup>。長部はその時、ジプシーが登場した映画『霧の夜の兇弾』『泣虫記者』を見て、「心臓が破裂しかけ、頭がぐらくらして鼻血が出そうになるほど興奮した」と後に告白している<sup>11)</sup>。

1953年春、長部は早稲田大学の入試に合格した。入学手続きを終えたあと、「まっしぐらという感じでしかも怖怖と東劇おぞおぞパーレスク・ルームに向かった」が、初めての鑑賞で、心は穏やかではなかった。「上にコートを着てはいても学生服でストリップ劇場に入るのは、はなはだ気恥ずかしいうえに後ろめたくもあって、秘密のクラブめいた雰囲気が漂う場内の椅子に身を沈めたときは、ひどく墮落したような惨めな気持ちになった長部は、「まんはったんの壺」というショーが始まると、その気持ちは薄れてしまい、

おもっていたより遥かに色白く、骨格のスケールが大きい豊満な肉体は、も

ちろん迫力充分だが、さらに衝撃的なのは、エキゾチックな美貌を挑むように客席に向けて、見る者を睨みつける威圧的な視線だった。顔と体がこちらを向いたとき、彼女の目に射竦められた気がして、ほくは戦慄した。(略) これでもか、これでもか、と腰を回しつづけた。有名なグライドだが、その動きは、見る者を誘<sup>いざな</sup>いつつ、同時に拒否していた。

ジプシーを直に見た長部は、自分の「女性にたいして無条件に降参してひれ伏し、足下から仰ぎ見て魅力を讃美したいと希<sup>こいねが</sup>うほくのマゾヒズムは、この瞬間に決定されたのかもしれない」と後に追想している<sup>12)</sup>。彼女のショーから受けた衝撃は長部の生涯忘れられないものであり、彼の女性観の形成に大きな役割を果たしたようである。雑誌記者を担当するようになった長部は、残念なことにジプシーと直接会って、話をしたことはなかった。

ちなみに、長部より2年遅れて1955年8月8日に日劇ミュージック・ホールで「誘惑の愉しみ」というショーに登場したジプシーを見た谷崎潤一郎は、長部と非常に違う感想を持っている。「ジプシーローズはこゝのプリマドンナらしいけれどもやゝ老けてゐて体に脂肪があり過ぎると、混血児らしい容貌なのとが予の趣味に合はず。」と書いている<sup>13)</sup>。

その日劇時代に頻繁にジプシーの楽屋に通ったのは版画家棟方志功で、彼女の楽屋に座り込み、雑談を楽しんでいたという<sup>14)</sup>。また、ジプシーは東郷青児に誘われ、二科展の前夜祭のために、ヌードでオープンカーに乗って白昼の銀座の目抜き通りから上野までパレードしたこともある<sup>15)</sup>。

ジプシーに傾倒した長部は、13年後、週刊『アサヒ芸能』の連載読物「にっぽんの女」のライターの一<sup>人</sup>として、1966年1月23日の記載号に、彼女について書き、「私はジプシー・ローズに、女体の美しさを教えられた。ジプシー・ローズは、私の教科書だ」という絶賛の言葉を並べている<sup>16)</sup>。

ストリップ界の大スターだったジプシーは、世間に忘れられていた時期に、彼女の昔の光を呼び覚ました長部の文章を読んで感激している。すぐ長部に手紙

を出した。その手紙は長部にとって、女神が授けてくれた宝物であった。

### 3. 手紙の読み方

『アサヒ芸能』の編集部気付で寄越したその手紙を受け取った長部の両手は、「ワナワナと震え」ていた。その手紙を繰返し読み、酒場にいる友だちにも見せて、二人でこの宝物の貴重さをしんみりと味わった<sup>17)</sup>。その手紙の内容は、撮影された手紙の写真に基づいて引用しよう。

長部日出雄様、

アサヒ芸能一月二十三日号、記載“にっぽんの女”の御筆稿、興味深く拝読させて頂きました。

一昔以後の私しは、日本全土のキャバレーやナイトクラブ専門に旅鳥的なお仕事続けております。

弘前は、長部さんの故郷とか——

弘前のお堀端に弘前芸能と申す社があり、広瀬元美さんの照会で、昨年参った事がございます。

丁度、桜が満開の頃でしたので特に印象的です。

私し、此の度、久保書店から仮題「吾が名は宿無し」なる自分の半生記を出版させて頂くことになりました。

二月上旬、出版の予定でございます。

何卒御笑覧の程を——。

知己を得ずして、差し出すふつつかな拙文をお許し下さいませ。

実は、私し如き者にも、かつてはかかるハイクラスの殿方が……と、存じ上げますとすっかりうれしくなりと、いった次第です。

一月下旬帰京の予定です。

一献かたむける機会に恵まれますれば、光栄の至りです。

一月十五日

ジブシー・ローズ拝<sup>18)</sup>

長部はこの手紙について随筆を二つ書いている。一つは『女神がくれた宝物』（初出『小説CLUB』1973年7月号）で、もう一つは『ジプシー・ローズの手紙』（初出『別冊文芸春秋』1987年181号）である。前者と比べれば、後者の方が遙かに描写の内容が詳しく、優れた芸術品となっている。以下は、この随筆2篇に基づいて、長部の読み方を分析してみる。

長部は、その手紙は本当に彼女のものかと疑うようになった。「文章がうまく、それになにより筆跡が見事すぎたから」だという理由を挙げている。彼女の伴侶で演出家の正邦乙彦が書いたのではないかと推測している。自分が「女神」の直筆の手紙をもらうほどの幸運をまだ信じられないのである。

手紙にある一文「かかるハイクラスの殿方が」を読んだ長部は、恐縮してしまい、「実際のこちらは、下駄ばきで腰に手拭いをぶらさげた田舎者だったのだ」というユーモラスな自画像を作っている<sup>19)</sup>。これは長部独特な冗談である。ジプシーは「ハイクラス」という言葉を一般の文化人に使った例がほかにもある。例えば、彼女の『裸の自叙伝』では、東劇バーレスク開場の前夜祭に雲集した文化人を指して、「あの前夜祭の怖いようなハイクラスの客席」と書いたことがある<sup>20)</sup>。

後に、長部は演出家正邦と会って、手紙の筆跡が間違いなくジプシーのものだと確認できた。だが、それと同時に正邦は、ジプシーが「寺山修司さんがわたしのことを書いてくれた」といって喜んでいたことをも教えた。長部は「成程、とおもった。寺山修司なら、たしかに『ハイクラスの殿方』にちがいない」、「青森県の出身というから、彼女は寺山修司が書いたものとおもい違いしていたのかもしれない」と考える<sup>21)</sup>。ジプシーが「無名な」自分に手紙を寄越すはずはないという思いを持ち続ける。

しかし、ジプシーがはっきりと長部という人を意識して、手紙を出したことは簡単に証明されている。手紙の冒頭は「長部日出雄様」とあるし、「弘前は、長部さんの故郷とか」と文中に書き、長部の名前を繰り返している。封筒の宛名も「長部日出雄」である。彼を寺山修司として勘違いしていないのは一目瞭

然である。その手紙をもらった数箇月後、長部のところにジプシーの『裸の自叙伝』の出版記念会の通知も届いている<sup>22)</sup>。それは長部が紛らわしい存在ではなかったことを意味している。

だが、長部は随筆『ジプシー・ローズの手紙』の中で彼女の手紙を全文引用しているにもかかわらず、「弘前は、長部さんの故郷とか」というところで、わざと自分の名前を伏せて、「弘前は、貴方の故郷とか」と書き換えている<sup>23)</sup>。このため、手紙の原文を読んでいない読者は、ジプシーがもしや本当に長部を寺山と間違えているのではないかと信じかねない。

当時、一世を風靡する劇作家の寺山修司と違って、『アサヒ芸能』にジプシーのことを書いたときの長部は、最初のドキュメンタリー小説『死刑台への逃走』を出す1969年よりも3年前だったので、さほど有名ではないことは確かである。小説などをよく読んでいたジプシーは、「無名な」長部を、有名な寺山修司と混同する可能性は少ないのではないかと私は思う。それでも、自分を「田舎者」と描き、寺山と間違えられて、「女神」からの手紙は人違いだった、という拍子抜けした落胆ぶりは、読者を破顔させる。

#### 4. 長部文学の一特徴

このような低姿勢とユーモアは、長部文学の特徴の一つで、読者の笑いを誘う常套手段である。この二つの随筆のなかではこのような書き方はほかにもある。『女神がくれた宝物』では、すでに引用したように、自分のことを「ニキビだらけの田舎の高校生」とか、「下駄ばきで腰に手拭いをぶらさげた田舎者」だと言うし、『ジプシー・ローズの手紙』では、

勉強のためと称して読んでいた（じつは周囲にたいする見栄でただ目をあてているだけだった）英字新聞に、ジプシー・ローズの大きな写真と記事が載り、それから映画演劇のガイド欄に出ている東劇パーレスク・ルームのショーの題名や開演時間を、ちょうど辞書の性的な言葉に唾をのむのとおな

じで、胸の高鳴りを覚えながら何度も繰り返して見るようになった。

とか、

天才は、ごく短い時間に、自分を燃やし尽くす。その高度は、目映まばゆいばかりに明るい。だがそれに要する大変なエネルギーは、自分の人生のずっと先の時間からも取られているのだ。だから天才は、しばしば夭折するのだし、死なないとしても、落魄とか不遇とか病苦とか、さまざまなかたちで先に使ってしまった時間の借りを返していかなければならない。

(略) しかし、天才でないぼくは、まだ破滅するわけにはいかない。

と書く。しかし、注目すべきなのは、低姿勢な自画像と裏腹に、随筆そのものには香り高い文学の気品が漂っている。

一例を挙げれば、『ジプシー・ローズの手紙』では、東劇バーレスクでジプシーを初めて見た時、「ひどく墮落したような惨めな気持ちになった」という心理描写がある。いかにも破戒寸前の若者の純粋な気持ちが表われている。

その描写と呼応するかのように、随筆の終わりに、

カクテルグラスの底に残ったチェリーを、口に入れて噛みしめたら、恐ろしいほど甘美で芳醇な味わいで、ふと禁断の木の実という言葉がおもい出され、その甘いアルコール漬けの漿果が、遠いところにいるジプシーからの手紙であるような気がした。そうだ、こんどこのホテルのバーに来たときは……またマンハッタンを頼んでゆっくりと啜り、チェリーの味を噛みしめて、現実には書かれなかったジプシー・ローズからの手紙を読むことにしよう。

と結ばれている。

これは、「禁断の実」を食べたイヴとアダムが樂園から追放されたようなこと



を印象づける書き方である。チェリーを「禁断の木の实」としたのは、ジプシーを初めて見た時の「墮落したような惨めな気持」を呼び起こしながら、同じ言葉を使い繰り返さず、むしろチェリーの味を描き、その赤い色を読者に連想させ、〈罪〉の感覚を匂わせているのである。

この随筆の構造は長部が、卒倒したジプシーがスロー・ジンの酒の瓶を握っていた<sup>24)</sup> ことを思い出して、スロー・ジンを注文し、最初に見たジプシーのショー『まんはったんの壺』と同名の酒マンハッタンを飲みながら、彼女への心酔を振り返る、というものになっている。マンハッタンに入れられたそのチェリーに伴われている甘美の味と色は、過去のジプシーと現在の長部を結びつけ、ジプシーをめぐる記憶の反芻となっている。そのチェリーをじっくり味わうことは、「現実には書かれなかったジプシー・ローズからの手紙」を想像することであり、ジプシーから受け取った美と性のメッセージを、本当の〈手紙〉としているのである。

必ずしも〈上品〉〈優雅〉とは言えない娯楽界のストリップ・ティーズを対象にして、ストリッパー女王の前で平伏した自分の姿を描きながら、その女王を追懐するために用いた、抑制の利いたおぼろげな表現は、この随筆のもつ微妙なバランスを見せてくれている。ここで長部は、文章の構成、文字の使用、イメージの選択などに細心の工夫を施して、チェリーの味覚と色覚を通して、異郷性を持つ女王への憧憬と哀惜をユーモラスに織り交ぜている。この作品は、「青春時代にいちばん強烈な、目も眩むばかりの魅惑を感じさせた不世出の大スター」に捧げるのにふさわしい、芳しい色合いに包まれた芸術品である。

このような娯楽性と芸術性との融合が長部日出雄の文学の一特徴と言えよう。

〔注〕

- 1) 小柳詳助『G線上のマリアー・ジブシー・ローズ・ブルーノート』（徳間書店、1982年）103頁。ただし、ジブシーの自伝では、生まれ年は1935年とされている。ジブシー・ローズ『裸の自叙伝 ストリップ半生記』（久保書店、1966年）8頁。
- 2) 岡聡「ジブシー・ローズ追悼—もうやめよう、こんな話は哀しくなる」『映画評論』24巻7号、1967年6月、135頁。
- 3) 小柳詳助『G線上のマリアー・ジブシー・ローズ・ブルーノート』23頁。
- 4) ジブシー・ローズ『裸の自叙伝 ストリップ半生記』100頁。
- 5) 小柳詳助『G線上のマリアー・ジブシー・ローズ・ブルーノート』24頁。
- 6) 発起人は伊藤深水、中村元督、水谷八重子、市川左団次、中村勘三郎、三井高篤、林房雄、久保田万太郎、式場隆三郎、東郷青児、舟橋聖一、菅原通齊、奥野真太郎、木村荘八、宮田重夫、高橋歳雄。小柳詳助『G線上のマリアー・ジブシー・ローズ・ブルーノート』（28頁）による。
- 7) ジブシー・ローズ『裸の自叙伝 ストリップ半生記』187頁。
- 8) ジブシー・ローズ『裸の自叙伝 ストリップ半生記』78-85頁。
- 9) 小柳詳助『G線上のマリアー・ジブシー・ローズ・ブルーノート』213頁。
- 10) 長部日出雄『女神がくれた宝物』（初出『小説CLUB』1973年7月号）『いつか見た夢』所収（津軽書房、1976年）167-168頁。
- 11) 長部日出雄『ジブシー・ローズの手紙』（初出『別冊文芸春秋』1987年181号）『愉快な撮影隊』所収（毎日新聞社、1992年）75頁。
- 12) 長部日出雄『ジブシー・ローズの手紙』76-77頁。
- 13) 谷崎潤一郎『過酸化マンガンの夢』（初出、『中央公論』1955年11月号）『谷崎潤一郎全集』第17巻（中央公論社、1983年）260頁。
- 14) ジブシー・ローズ『裸の自叙伝 ストリップ半生記』104-107頁。
- 15) ジブシー・ローズ『裸の自叙伝 ストリップ半生記』228頁。
- 16) 長部日出雄『女神がくれた宝物』168頁。
- 17) 長部日出雄『女神がくれた宝物』166-167頁。
- 18) 小柳詳助『G線上のマリアー・ジブシー・ローズ・ブルーノート』見返しにあるジブシー・ローズ直筆の手紙の撮影写真に基づき引用する。
- 19) 長部日出雄『女神がくれた宝物』169頁。
- 20) ジブシー・ローズ『裸の自叙伝 ストリップ半生記』197頁。
- 21) 長部日出雄『女神がくれた宝物』170頁。
- 22) 長部日出雄『ジブシー・ローズの手紙』83頁。
- 23) 長部日出雄『ジブシー・ローズの手紙』77頁。
- 24) ジブシー・ローズがスロー・ジンの酒壺を手にして倒れて死んだことが正邦乙彦の証言で通説となっている。だが、作家田中小実昌が聞き出した正邦の告白によれば、ジブシーがベッドの中で死んでから、正邦が彼女をベッドから降ろして、酒壺を彼女に握らせたように「演出」しただけではなく、友人に頼んでその現場を写真に撮ってもらった。田中小実昌『楽屋ばなし いとしのジブシー・ローズと踊り子たち』（文芸春秋、1992年）94頁。

\* 討議要旨

カリン・ゲニラ・リンドバーグ=ワダ氏は、アメリカにもジブシー・ローズ・リーというストリッパーが存在したようだが、何か関連性はあるのか、と尋ね、発表者は、ジブシー・ローズ・リーはストリッパーであるとともに推理小説も書いた人物であり、日本のジブシー・ローズ（本名・志水敏子）

は芸名をつける際に彼女を意識したと考えられる、なぜなら敏子はアメリカのジプシー・ローズ・リーの映像を見て、ダンス等を熱心に学んでいるから、と答えた。さらにリンドバーグ＝ワグ氏は、長部はそのアメリカの映像を見ているのか、と質問し、発表者は、映像にも小説にも目を通していろいろ、と回答した。

デニツァ・ガブラコワ氏は、①ジプシー・ローズという芸名は、「ジプシー」というボヘミアンに対する想像力を伴うものなのか、②彼女は混血児なのか、③長部の小説に描かれる女性像には、ジプシー・ローズの存在が投影されているのか、と質問した。発表者は、①宿泊先を転々とし自由な放浪生活を送っていたから、②混血児を思わせる容貌であったが、事実はわからない、③長部は自己をマゾヒズム的傾向があると分析し、ジプシー・ローズの影響について自ら書き記している。作中の女性像に関しても、女性に対するまなざしは常に優しさに溢れている、と回答した。

関礼子氏は、ジプシー・ローズは占領期が終わる頃活躍したわけだが、先の第3セッションで取り上げられた「時代性」と、長部文学の特徴とされる〈娯楽性〉との関連性について何か意見はないか、と尋ね、発表者は、長部の作品には同時代の風俗が盛んに描かれており、日本の一時代を考察する上でも有効な作品が多い、と答えた。